

## 年代別からみた「夫婦親密度尺度」からの検討

近喰 ふじ子<sup>1)</sup> 塚本 尚子<sup>2)</sup> 安藤 哲也<sup>3)</sup>

A study of an “Intimacy Scale of Relationships Between Husbands and Wives” viewed by age

Fujiko KONJIKI Naoko TSUKAMOTO Tetsuya ANDO

### 要旨

筆者らは2010年に「夫婦親密度尺度」を完成させた。「夫婦親密度尺度」は、親関係項目4因子（①安定型夫婦 ②依存型夫婦 ③不満型夫婦 ④尊重型夫婦）と子ども関係項目4因子（①子ども重視型夫婦 ②子ども否定型夫婦 ③子ども不信型夫婦 ④子ども干渉型夫婦）から成っている。この「夫婦親密度尺度」を30～60代の男女811名（30代130名、40代289名、50代216名、60代176名）に新たに実施し、フェイスシート（子ども数、結婚年数、夫婦の両親との同居の有無、現在の仕事、暮らし向き、結婚の経緯など）を加え、年代別に検討をおこなった。

その結果、1. 30～50代の夫婦は60代の夫婦に比べお見合い結婚よりも恋愛結婚が多く、年代と結婚の経緯との間で有意差（ $P<0.01$ ）がみられていた。そのため、恋愛結婚はお見合い結婚よりも夫婦の距離が近く、情緒的關係が強くなる傾向が推察された。2. 40代では「依存型夫婦」が多く、40～50代の母親は子育てによる不安が高くなり、何かに依存することで安定を保とうとすることから夫婦の情緒的な結びつきが強くなる傾向が想定された。3. 子どもに対しては、母親は「子ども重視型夫婦」であるのに対し、父親は必ずしも「子ども重視型夫婦」とは限らなかった。4. 最近の家族機能の変化は父親が母親との関係性を重要と考え、それ故、母親よりも父親による子どもへの関わりや役割分担による負担などが増えていることからの変化ではないかと推察された。

キーワード：1. 「夫婦親密度尺度」 2. 家族機能 3. 父親 4. 母親

### はじめに

筆者らは新しく作成した「夫婦親密度尺度」をTW医科大学東医療センター 小児科の肥満外来で施行する機会を得た。肥満外来では「夫婦親密度尺度」の他に、患児と両親（外来に付き添った母親ないしは、父親）への半構造化面接をS教授の了解のもと、S教授から患児と両親への説明がなされた。すなわち、インフォームドコンセントの得られた患児とその母親ないしは、父親を対象とした。その結果、肥満児の両親のうち親関係項目では10名（58.8%）が「依存型夫婦」で、子

ども関係項目では8名（47.1%）が「子ども否定型夫婦」であった<sup>1)</sup>。すなわち、肥満児の両親の約半数は依存型・子ども否定型夫婦であり、両親共に40代であった（図1）。肥満児を養育してい

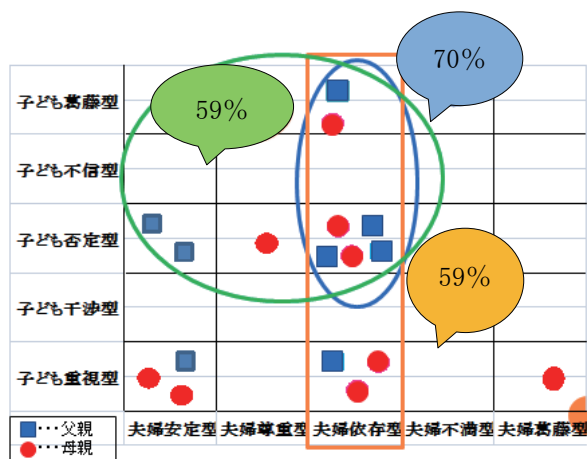


図1. 肥満児の両親の夫婦像と子ども像との関係

1) 東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科  
2) 上智大学総合学部看護学科  
3) 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 心身医学研究部

る両親の多くが40代であったことから、年代別夫婦像を明らかにするべきではないかと考え、新たに「夫婦親密度尺度」とフェイスシート(年齢、子ども数、職業など7項目)を調査したので報告する。

### 対象

東京都、埼玉県、青森県、岩手県、兵庫県など幅広い地域に居住する30～60代までの既婚者の計811名(30代の男女130名、40代の男女289名、50代の男女216名、60代の男女176名)を対象とした。なお、協力した男女は必ずしも夫婦とは限定しなかった。

### 方法

回収されたフェイスシート(先にも述べた年齢、子ども数、職業などの7項目)の内容をそれぞれの年代別に集計し、同時に「夫婦親密度尺度」の合計点(親関係項目、子ども関係項目)を算出した。但し、親関係項目において、2つの型が同じ点数となった場合は「葛藤型夫婦」、子ども関係項目においても2つの型が同じ点数となった場合は「子ども葛藤型夫婦」とした。なお、集計の際、1項目でも回答のなかった者は除外するのではなく、その箇所のみを除外とした。また、統計処理は $\chi^2$ 検定でおこなった。

## 結果

### I. フェイスシートから

#### 1. 子ども数

どの年代も子ども数は2名が最も多く60%前後で、有意差は認められなかった(表1)。

#### 2. 親との同居の有無

どの年代においても親と同居していない者が70%前後にみられ、同居をしていた夫婦に比べると2倍強であったが有意差は認められなかった(表2)。但し、親は夫側、妻側のどちらの親でも同居していれば同居有、同居なければ同居無とした。

#### 3. 現在の仕事

30～50代までの年代では会社員が最も多く30%前後で、60代になると無職が約半数にみられたが有意差は認められなかった(表3)。

#### 4. 暮らし向き

どの年代においても、暮らし向きは中流であると答えていた者が約60%で、中流上・中流・中流下を合わせると約90%であり、有意差は認められなかった(表4)。

#### 5. 結婚に至った経緯

30～50代までの年代ではお見合い結婚よりも恋愛結婚の方が多くみられ(70%前後)、60代は恋愛結婚よりもお見合い結婚の方がやや多く(約半数)、年代と結婚の経緯との間で有意差( $P<0.01$ )が認められていた(表5)。

表1. 年代別による子ども数

	30代 (N=130)	40代 (N=288)	50代 (N=216)	60代 (N=176)
0名	0	0	2(0.93)	9(5.11)
1名	38(29.2)	27(9.4)	7(3.24)	13(7.39)
2名	69(53.1)	174(60.4)	122(56.5)	107(60.8)
3名	21(16.2)	81(28.12)	75(34.7)	42(23.9)
4名	1(0.75)	6(2.08)	10(4.63)	5(2.8)
5名	1(0.75)	0	0	0

( )%

表 2. 年代別による父方ないしは、母方の親と同居の有無

	30代 (N=130)	40代 (N=288)	50代 (N=213)	60代 (N=174)
有	36(27.7)	98(34.0)	68(31.9)	38(21.8)
無	94(72.3)	190(66.0)	145(68.1)	136(78.2)

( )%

表 3. 年代別による現在の職業

	30代 (N=128)	40代 (N=286)	50代 (N=211)	60代 (N=167)
無職	22(17.2)	28(9.8)	27(12.8)	75(44.9)
パート	21(16.4)	73(25.5)	29(13.7)	15(8.9)
派遣社員	6(4.7)	4(1.4)	2(1.0)	1(0.6)
会社員	43(33.6)	80(28.0)	62(29.4)	12(7.2)
自営業	4(3.1)	15(5.3)	22(10.4)	18(10.8)
公務員	5(3.9)	39(13.6)	33(15.6)	6(3.6)
専門職	17(13.3)	19(6.6)	13(6.2)	7(4.2)
会社役員	5(3.9)	16(5.6)	12(5.7)	13(7.8)
その他	5(3.9)	12(4.2)	11(5.2)	20(12.0)

( )%

表 4. 年代別からみた暮らし向き状況

	30代 (N=128)	40代 (N=284)	50代 (N=215)	60代 (N=173)
上流	0	1(0.4)	4(1.9)	3(1.7)
中流の上	13(10.2)	57(20.0)	29(13.5)	32(18.5)
中流	88(68.7)	180(63.4)	131(60.9)	113(65.3)
中流の下	22(17.2)	40(14.1)	45(20.9)	22(12.8)
下流	5(3.9)	6(2.1)	6(2.8)	3(1.7)

( )%

表 5. 年代別による結婚の経緯

	30代 (N=130)	40代 (N=289)	50代 (N=214)	60代 (N=163)
お見合い結婚	40(30.8)	96(33.2)	54(25.2)	91(55.8)
恋愛結婚	90(69.2)	193(66.8)	160(74.8)	72(44.2)
その他	0	0	0	0

( )%

## II. 「夫婦親密度尺度」から

「夫婦親密度尺度」は親関係項目の4因子（安定型夫婦、依存型夫婦、不満型夫婦、尊重型夫婦）と子ども関係項目の4因子（子ども重視型夫婦、子ども否定型夫婦、子ども不信型夫婦、子ども干渉型夫婦）から構成されている<sup>1)</sup>。

### 1. 年代別夫婦像

30代で最も多かったのは「安定型夫婦」で70名（56.1%）、次いで「依存型夫婦」で35名（26.5%）であった。40代では「依存型夫婦」が最も多く141名（50.4%）、次いで「安定型

夫婦」で104名（34.4%）であった。50代で最も多かったのは「安定型夫婦」で96名（44.0%）、次いで「依存型夫婦」で94名（43.5%）であった。60代で最も多かったのは「安定型夫婦」で142名（86.3%）、次いで「依存型夫婦」で16名（7.3%）であった。30～60代のどの年代でも3番目は「葛藤型夫婦」であった（表6）。

### 2. 年代別子ども像

30～60代のどの年代も「子ども重視型夫婦」が最も多く、次いで「子ども否定型夫婦」であった。なお、3番目は全ての年代共に「子ども

葛藤型夫婦」であった（表 7）。

### 3. 父親像からみた子ども像

父親が「安定型夫婦」の子ども像の1位は「子ども重視型夫婦（69.2%）」、2位は「子ども否定型夫婦（28.0%）」、3位は「子ども葛藤型夫婦（2.1%）」で、父親が「依存型夫婦」の子ども像の1位は「子ども重視型夫婦（60.2%）」、2位は「子ども否定型夫婦（36.1%）」、3位は

「子ども葛藤型夫婦（2.4%）」で、父親が「葛藤型夫婦」の子ども像の1位は「子ども否定型夫婦（92.9%）」、2位は「子ども干渉型夫婦（7.2%）」であった（表 8）。

### 4. 母親からみた子ども像

母親が「安定型夫婦」、「依存型夫婦」、「不満型夫婦」「葛藤型夫婦」のどのタイプも、「子ども重視型夫婦」が100%であった（表 9）。

表 6. 年代別による夫婦像の順位

	30代 (N=129)	40代 (N=289)	50代 (N=216)	60代 (N=166)
1位	「安定型夫婦」 70(56.1)	「依存型夫婦」 141(50.4)	「安定型夫婦」 96(44.0)	「安定型夫婦」 142(86.3)
2位	「依存型夫婦」 35(26.5)	「安定型夫婦」 104(34.4)	「依存型夫婦」 94(43.5)	「依存型夫婦」 16(7.3)
3位	「葛藤型夫婦」 15(11.1)	「葛藤型夫婦」 30(10.0)	「葛藤型夫婦」 19(8.7)	「葛藤型夫婦」 8(4.0)

( )%

表 7. 年代別による子ども像の順位

	30代 (N=130)	40代 (N=288)	50代 (N=216)	60代 (N=162)
1位	「子ども重視型夫婦」 95(71.3)	「子ども重視型夫婦」 228(78.6)	「子ども重視型夫婦」 178(84.2)	「子ども重視型夫婦」 159(98.5)
2位	「子ども否定型夫婦」 28(23.5)	「子ども否定型夫婦」 53(19.2)	「子ども否定型夫婦」 35(15.4)	「子ども否定型夫婦」 2(0.7)
3位	「子ども葛藤型夫婦」 6(4.4)	「子ども葛藤型夫婦」 8(2.2)	「子ども葛藤型夫婦」 3(0.5)	「子ども葛藤型夫婦」 1(0.7)

( )%

表 8. 父親からみた子ども像

夫婦像	子ども像
「安定型夫婦」(N=143)	1位「子ども重視型夫婦」99(69.2) 2位「子ども否定型夫婦」41(28.0) 3位「子ども葛藤型夫婦」3(2.1)
「依存型夫婦」(N=83)	1位「子ども重視型夫婦」50(60.2) 2位「子ども否定型夫婦」30(36.1) 3位「子ども葛藤型夫婦」3(2.4)
「葛藤型夫婦」(N=14)	1位「子ども否定型夫婦」13(92.8) 2位「子ども干渉型夫婦」1(7.2)

( )%

表 9. 母親からみた子ども像

夫婦像	子ども像
「安定型夫婦」(N=175)	「子ども重視型夫婦」175(100)
「依存型夫婦」(N=149)	「子ども重視型夫婦」149(100)
「不満型夫婦」(N=12)	「子ども重視型夫婦」12(100)
「葛藤型夫婦」(N=24)	「子ども重視型夫婦」24(100)

( )%

## 考察

近喰は数年前から夫婦関係が子どもに与える影響に変化が生じていることを実感し、それが夫婦関係そのものの変化によることではないかと考えてきた。そのことを検証する一歩として、「夫婦親密度尺度」を作成した<sup>2)</sup>。今回、肥満児を養育している両親の「夫婦親密度尺度」の結果をふまえ、「夫婦親密度尺度」を新たに施行し、年代別に明らかにすることを試みた。

そこで、年代別に結婚年数、子ども数、親との同居、現在の仕事、自覚的暮らし向き、結婚に至った経緯などをみたところ、年代と結婚に至った経緯のみとの間で有意差 ( $P<0.01$ ) がみられていた。すなわち、30～50代は恋愛結婚が70%前後であるのに対し、60代はお見合い結婚の方が恋愛結婚よりもやや多く、結婚に至った経緯は少なくとも家族機能に影響を与える要因の一つと考えられるのではないかと思われた。ここで重要なことは、結婚に至った経緯それ自体が夫婦の距離の取り方に影響を与えるのではないかということであり、恋愛結婚の場合はお見合い結婚の場合よりも夫婦の距離が近くなり、遠慮のない関係が展開されているのではないかと考えられた。そのため、子どもの問題よりも夫婦関係を重視する傾向が生まれ易くなるのではないかとも思われた。数井らは家族システムに与える影響には子どもの愛着、母親の認知する夫婦関係と母親の育児ストレスの3つを挙げ、夫婦関係が調和的であることを重視した。しかし、例え、夫婦関係が少し悪いとしても親としてどう感じているのか、親になったことで直面している問題の有無などが影響すると述べている<sup>3)</sup>。また、福井は夫婦関係が良好でない場合、特に、母親の子どもに対する摂食傾向が強くなる傾向を報告している<sup>4)</sup>。さらに、水島は夫婦間の役割には夫婦の情緒的関係性や

夫婦をとりまく環境の変化も影響を与える要因と述べている<sup>5)</sup>。このように、夫婦関係の良否が子どもに与える影響についての結論は得られていないのが現状であろう。従来、筆者がおこなってきた家族面接では夫婦関係の悪さが子どもに影響を与えていることが多かったと記憶している。しかし、最近、子どもの問題で受診する両親は必ずしも夫婦関係が悪くはなく、寧ろお互いに思いやる夫婦に出会うことが多いことを経験している。これらのことから、夫婦関係の良否は恋愛やお見合い結婚のいずれでも起こりうることではあるが、少なくとも結婚に至った経緯というものが夫婦の情緒的関係性の結びつきを強くし、お互いの理解ないしは、尊重を生み易くしているようにも考えられる。残念ながら、結婚形態別による夫婦関係の変化を論じた論文はみられていない。今後は結婚形態別による夫婦関係や子ども関係に及ぼす影響についての研究が必要なのかも知れないと思われ、時代的背景なども組み込んだ検討をしていきたいと考えている。

さて、各年代別による「夫婦親密度尺度」からみた夫婦像をみると、30代夫婦では「安定型夫婦」が56.1%、「依存型夫婦」が26.5%、40代夫婦では「安定型夫婦」が34.4%、「依存型夫婦」が50.4%、50代夫婦では「安定型夫婦」が44.0%、「依存型夫婦」が43.5%、60代夫婦では「安定型夫婦」が86.3%、「依存型夫婦」が7.3%であり、「安定型夫婦」は40代に最も低い谷型を呈し、「依存型夫婦」は40代をピークとした山型を呈し、50代には「安定型夫婦」と「依存型夫婦」がほぼ同率であった(図2)。このことから、夫婦にとっての危機的状況は40代に生じ易くなるが、子育てを通じ、再び情緒的に結びつくのではないかと考えられた。実際、氏家は子育て期の夫婦にとって、母親は行動と思考が関連し合ったシステ

ムとして機能しにくくなり、そのために何かに依存しやすくなると述べていることから夫婦の結びつきが強くなるのが想定され、この年代に依存型夫婦が多くなるのかも知れないと思われた<sup>6)</sup>。子ども像に関しては30代夫婦では「子ども重視型夫婦」が71.3%、「子ども否定型夫婦」が23.5%、40代夫婦では「子ども重視型夫婦」が78.6%、「子ども否定型夫婦」が19.2%、50代夫婦では「子ども重視型夫婦」が84.2%、「子ども否定型夫婦」が15.4%、60代夫婦では「子ども重視型夫婦」が98.5%、「子ども否定型夫婦」が0.7%であった。どの年代も「子ども重視型夫婦」が多く、その頻度は30代<40代<50代<60代と右上がりの上昇をし、「子ども否定型夫婦」の場合にはその頻度が30代>40代>50代>60代と右下がり型を呈していた(図3)。多くの夫婦は子どものことを大切に考えているようであった。しかし、父親ならびに、母親からの子ども像をみると、夫婦で異なっていた。すなわち、母

親は「安定型夫婦」、「依存型夫婦」、「不満型夫婦」、「葛藤型夫婦」の4タイプ共に「子ども重視型夫婦」が100%であるのに対し、父親は「安定型夫婦」、「依存型夫婦」では「子ども重視型夫婦」が約60%で、「葛藤型夫婦」では「子ども否定型夫婦」が約90%であり、必ずしも「子ども重視型夫婦」とは限らないことが分かった(図4, 5)。これらの事は、家庭では夫婦の距離が短く、遠慮のない関係が築かれ、その関係性の状況が子どもとの関係に変化を与えているのではないかと考えられた。しかし、母親は夫婦関係の変化に対しても子どもへの思いは変化することがなく、父親の方が子どもに対する思いよりも夫婦関係を重視する傾向が強くなったのではないかと推察された。ここ数年における家族機能の変化は、夫婦関係の中でも母親ではなく、父親の変化によるものではないかと推察され、父親の子どもへの関係が増していることが考えられた。

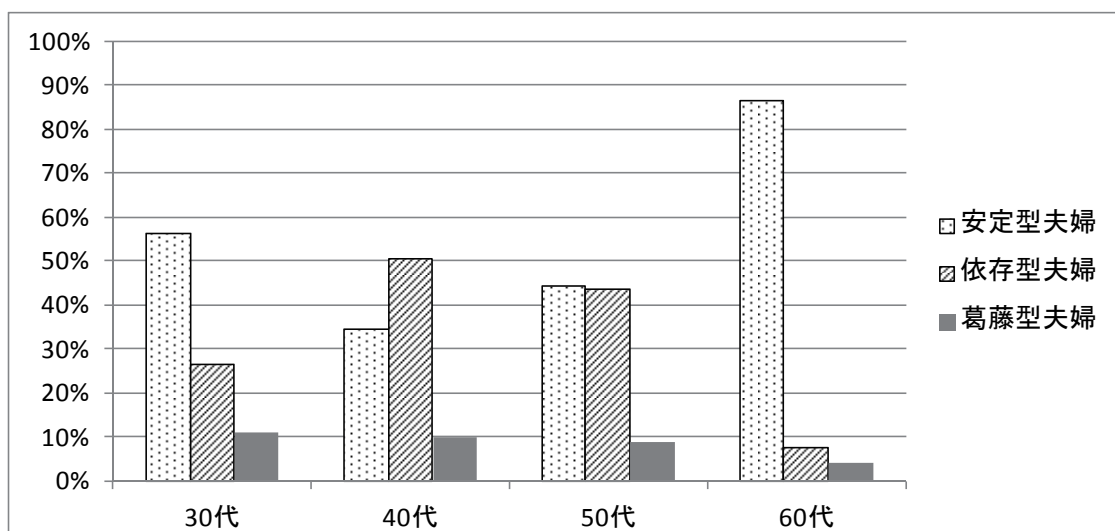


図2. 「夫婦親密度尺度」からみた夫婦像

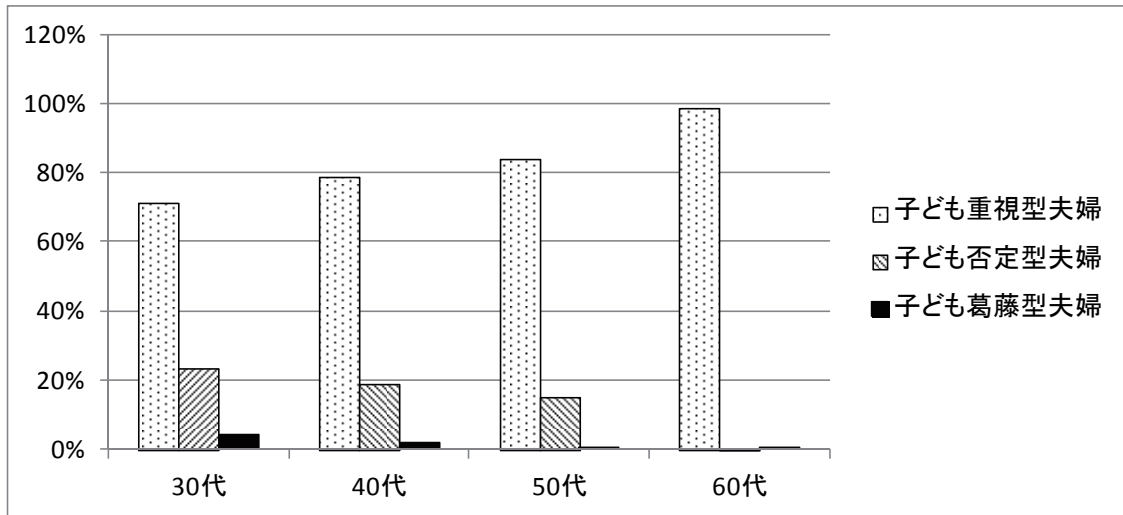


図 3. 「夫婦親密度尺度」からみた子ども像

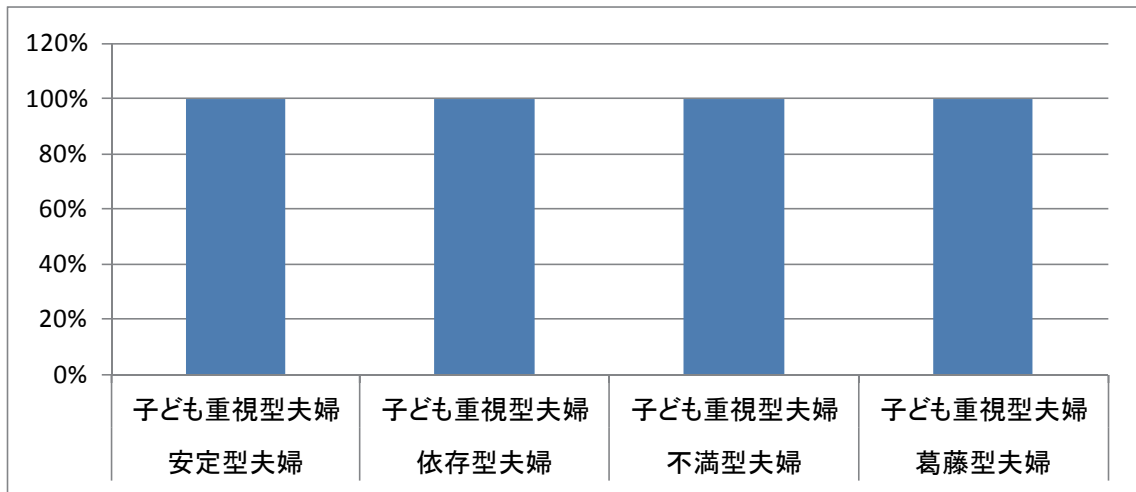


図 4. 母親からみた子ども像

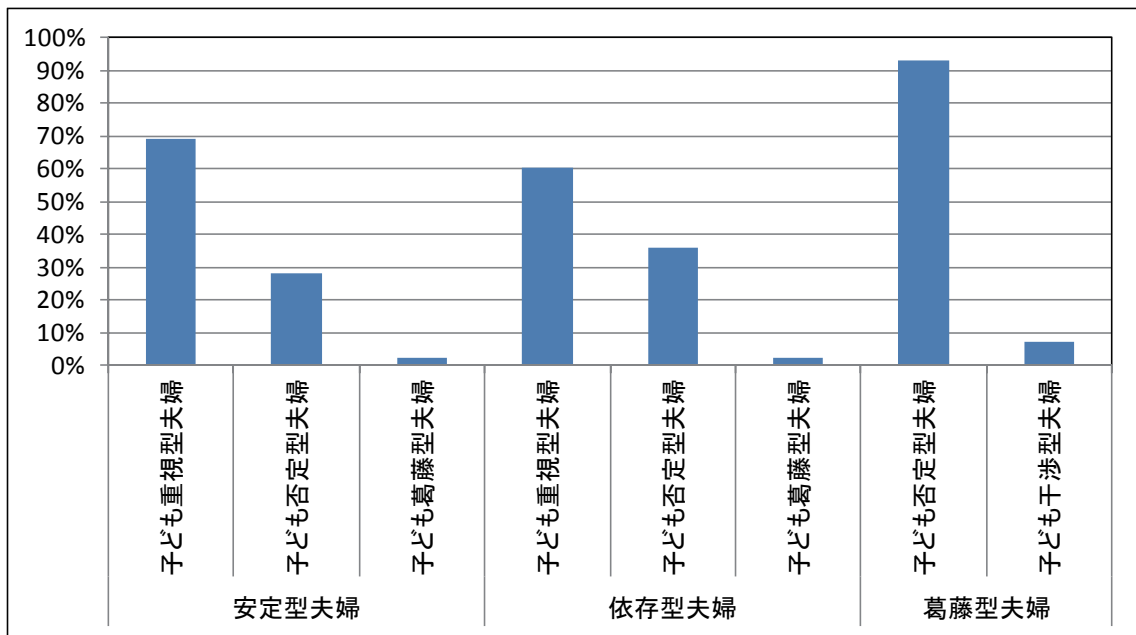


図 5. 父親からみた子ども像

## 結論

肥満児の両親の約 70%が「依存型夫婦」であったことを重視し、最近の夫婦を年代別に検討することを試みた。2010年に本論文に報告した「夫婦親密度尺度」を用い、再調査をおこなった。

1. 30～50代の夫婦は60代の夫婦に比べお見合い結婚よりも恋愛結婚が多く、年代と結婚形態とにおいて有意差がみられ ( $P<0.01$ )、恋愛結婚はお見合い結婚よりも夫婦の距離が近く、情緒的関係性が強くなる傾向が推察された。
2. 「依存型夫婦」は40代に最も多く、この40～50代における子育て期の母親は思考と行動の相互的なシステムが機能しにくくなり、何かに依存することで安定を保とうとすることから、夫婦の情緒的な結びつきが強くなる傾向が想定された。
3. 子どもに対する姿勢は夫婦でことなり、女性は何においても「子ども重視型夫婦」を優先しているのに対し、父親は必ずしも「子ども重視型夫婦」ではないことが示唆された。
4. 最近の家族機能の変化は、母親よりも父親による子どもへの関わりが増えていることからの変化ではないかと推察された。

なお、本論文は第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会（横浜市）においてポスター発表したものである。

## 文献

1. 塩田桃子、近喰ふじ子、杉原茂孝、他：肥満児を養育している両親の「夫婦親密度尺度」からの検討、71(4)、P.552～560、2012、小児保健研究
2. 近喰ふじ子、塚本尚子、安藤哲也、他：「夫婦親密度尺度」の開発とその試み、心身医学、50(12)、P.1171～118、2010
3. 数井みゆき、無藤 隆、園田菜摘：子どもの発達と母子関係・夫婦関係、幼児を持つ家族について、発達心理学研究、7(1)、31～40、1996
4. 福井佳織：夕食場面における母親・父親の幼児への摂食促し行動と幼児の情緒状態との関連、家族システム論的視点から、発達心理学研究、14(2)、161～171、2003
5. 水島かな江：第4章 ライフステージから見た夫婦関係、変化する社会と家庭、P.69～77.1998、建帛社（東京）

## Abstract

The author et al completed an “Intimacy Scale of Relationships Between Husbands and Wives” in 2010. The “Intimacy Scale of Relationships Between Husbands and Wives” is composed of four parent-related items, namely, (1)stable couple, (2)dependant couple, (3)discontented couple, and (4)mutual respect couple, and four child-related items, namely, (1)child-oriented couple (2)child-averse couple (3)child-distrust couple and (4)child-noninterference couple. The researchers selected 811 males and females in the 30s to 60s age bracket (130 people in their 30s, 289 people in their 40s, 216 people in their 50s, and 176 people in their 60s) and created profiles (number of children, years of marriage, whether living with husband’s or wife’s parents, jobs, life circumstances, marriage process, etc.) in order to create a study of the “Intimacy Scale of Relationships Between Husbands and Wives” by age.

Consequently

1. Relationships between couples in their 30s to 50s developed based more on love than having been



arranged when compared with couples in their 60s, however there were few differences between the relationships of couples in both groups( $P<0.01$ ) in terms of age and marriage process. As a result, 1. the researchers assumed that marriages based on love bring couples closer and make their bonds of affection stronger than those of people in arranged marriages. 2. They assumed that couples in their 40s were mostly “dependant couples” because mothers in their 40s and 50s have a lot of anxiety about raising children and want to maintain their stability by depending on something, and therefore come to feel strong bonds of affection with their partners. 3. As far as children were concerned, mothers were generally “child-oriented” but fathers were not always “child-oriented”. 4. Family functions were assumed to have changed in recent years largely due to fathers’ relationships with their children rather than mothers’, and due to the increasing number of fathers who help in child-raising and household chores.

**Key Words :** (1) Intimacy Scale of Relationships Between Husbands and Wives  
(2) Family function (3) Husbands (4) Wives